

編集後記

▼新学期がはじまりました。子どもとのあたたかい出会いの中で教師、親が直面する困難な問題に虐待・いじめ・不登校があります。その考察に役立つようにと特集を組みました。

▼県教委もこれらの問題に懸命に対処しています。虐待問題の研修体制が精神科医などの専門家の援助を組織して各地で組まれることや、「いじめの起きない学校づくり」いじめ防止学習プログラム」が本腰をいれて現場からはじまるようになっていねいな指導に期待したいと思いました。

▼新田氏には児童虐待について専門的な知識を事例をひいて分かりやすく書いていただきました。虐待は社会問題、高度文明社会に共通しておこる「子どもの人権侵害」という指摘、親の過緊張育児、子どもとの過剰適応への言及もしっかりと受け止めたいです。

▼細貝氏は県教委の「いじめ防止プログラム」の受け止め方を自分の職場の現実にとらして実践的に書いています。「対症療法的対応からの脱出を」と同プログラム検討委員長尾木直樹氏も書いていましたが、細貝氏も全職員が個人個人の経験主義的な事態への対応でなく

きちんとした調査とその分析の上にならって集団的にはじめていくことの大切さを指摘しています。

▼熊谷氏は不登校を経験した生徒、青年たち、それをささえつづけた親や支援者、全国教育研究会の同問題部会参加者の実践を豊かなくみつくした経験を総括的に整理して読者にこの問題にとりくむ視点を提供しました。特に、なぜ登校拒否というのか、という提起は皆で考えてみなくてはと思います。

▼小林氏の「越後の国は縄文にさかのぼる。雷と森の自然と共生して縄文中期に火炎土器を生み出す全盛期をむかえた。」…その生態学的な調和をもった生き方がいま問い直されている。その目で現代を見つめ直すべきでないか」というお話はとても含蓄にとんだものでした。歴史博物館にまた足をのばしたい。

▼古坂氏の「暮日本」を超えての中のもう一つの環日本海輪を興味深く読みました。日本海沿岸の国々の二十一世紀の交流は環境問題を主軸にとりお話しは小林氏のお話につづじるところではないでしょうか。

▼野々垣氏から寄せていただいた高知県四万十での「子育て・文化協同第十六回集會」の報告をよんで、当研究所にかかわるかたがたがくりひろげている多様な子育て・文化の活動を交流し合う場が年に一回ぐらいいほしいと

思いました。新潟の地でこの全国集會がひらかれたのはもう十四年前です。この間の子育て・教育の困難さの増大は野々垣氏の指摘のとおりです。それゆえにこそ協同の必要性がさらに強まっていると思うのです。

▼松原氏に報告していただいた歴史教科書問題の今後の展開が注目されています。小誌も次号でもとりあげていきます。
(本田)

にいがたの教育情報 No. 65

2001年3月31日発行

編集・発行 にいがた県民教育研究所

発行人 長崎 明
〒951 新潟市東中通1-86 山崎ビル
電話・FAX (025) 228-2924
振替口座・00640-0-12332
印刷所・中央印刷さびす

本誌内容の無断転載を禁じます。